

まえがき

三島由紀夫は、哲学的な知性に関しても、また芸術的な感性に関しても、近代日本の精神史の中で最も卓越した創造者の一人である。三島は、西洋の思想や文学を自分の方法で咀嚼し、それらを自身のうちに堆積していた日本的な感性に融合させ、小説に、戯曲に、そして評論に結晶させた。それらの作品に魅了されてきたのは、日本人だけではない。三島の熱心な読者は、世界中にいる。

それなのに、私たちは三島由紀夫を受けとめられずにいる。三島由紀夫が何だったのか理解できずにいる。三島の何をどう継承したらよいのか迷い、佇たたずんでいる。その理由は、はつきりしている。彼のあの最期のせいである。あれは極端な——これ以上はありえないほどに極端な——愚行だった……ように見える。とすると、三島をどう解釈したらよいのか。

ひとつの方法は、あの失敗した「クーデタ」のことはなかったかのように、それを無視して三島を読むことだ。が、それには、作家が最も大事にしていたものに頼かむりしているという後ろめたさともなう。少なくとも、あのような行動へと向かう可能性を読み込むことができなければ、三島をトータルに読んだことにはならないだろう。しかし、あの愚行を自覚的に視

野に収めたとたんに、つまりあの愚行があったという事実から遡及的に三島の書いたものを解釈したときには、今度は、彼の諸作品が色あせたものになり、それらが本来もっていたはずの魅力が消えてしまう。

というわけで、三島が残した膨大なテクストを前にして、私たちは何も言うことができず、ただ当惑するほかなくなってしまうのだ。

ならば、もう三島について考えることやめ、彼の作品を理解することも、そこから引き出しうる思想を継承しようとすることも、みな放棄してしまえばよいのではないか。だが、その場合には、私たちの喪失はあまりにも大きい。三島は、まちがいに近代日本の文学や思想の最も良質な部分を代表してもいるからだ。

敗戦から七十年以上が過ぎた。あるいは明治維新から百五十年が経った。日本人が西洋に接して、衝撃を受けてから、それなりに長い時間が経過し、今、私たちはとてつもない閉塞感の中にある。日本人は自信を失いつつある。わけのわからないこの行き止まり状況を、何とか打開したい。そう思っているとき、この七十年なり、百五十年なりの期間の中で最も豊かなポテンシャルを孕んだ作家の想像力を無視するとしたら、どうであろうか。そんなことをしたら、絶対に、この閉塞状況を乗り越えることはできないだろう。私たちは、戦後という時間に深く失望しつつ、奇妙なやり方の自裁の道を選んだ、この作家を読み直すことによってこそ、目下の閉塞の外へと脱出する道を見出すことができるはずである。